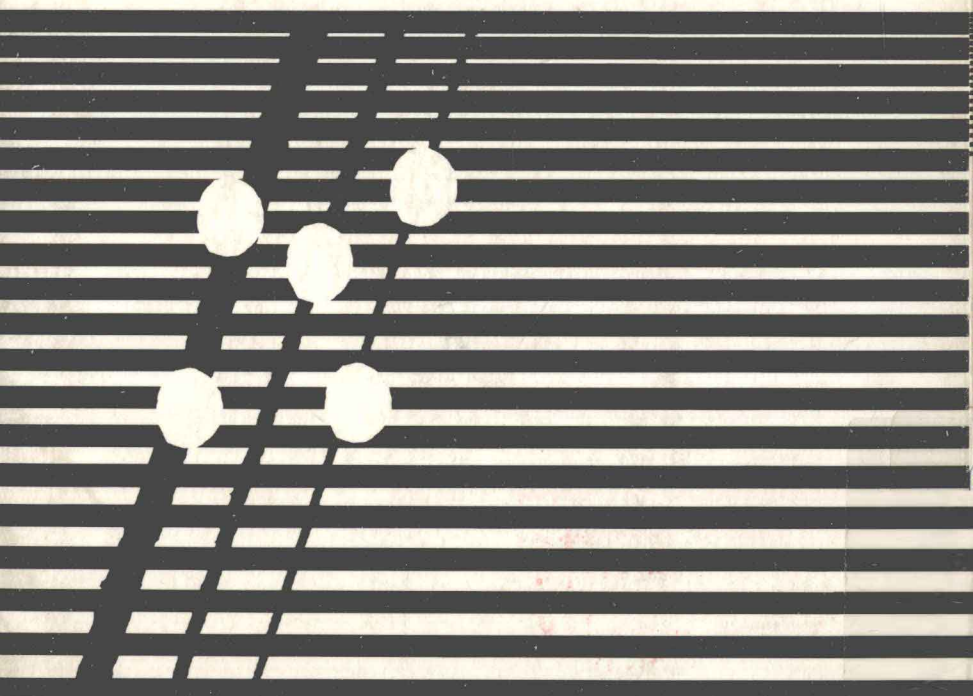


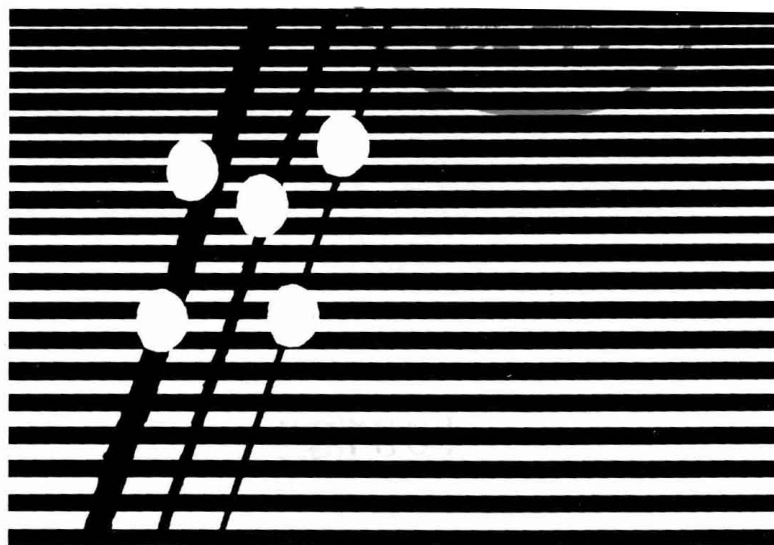
近松への招待

鳥越文蔵／内山美樹子
信多純／井口洋



近松への招待

鳥越文蔵／内山美樹子
信多純／井口洋



近松への招待

岩波セミナーブックス 31

1989年11月22日 第1刷発行 ©

定価 2500 円
(本体2427円)

著者	とり 鳥の 信 うち 内 井	ごえ 越 だ 多 やま 山 み 美 ぐち 口	ぶん 文 じゅん 純 き 樹	ぞう 蔵 いち 一 こ 子 ひろし 洋
発行者	緑	川	亨	

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所 株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・理想社 製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN 4-00-004201-7

目 次

第一回	近松の登場	1
-----	-------	---

一	近松の登場	4
---	-------	---

二	竹本座の座付作者となる	16
---	-------------	----

三	虚実皮膜論	20
---	-------	----

四	晩年の心境	23
---	-------	----

五	結語	28
---	----	----

第二回	近松作品と現行曲	33
-----	----------	----

——演出の変遷と改作・復活の問題——

一	近世の近松物上演概観	40
---	------------	----

二	「冥途の飛脚」の復活	44
---	------------	----

三	昭和の近松「脚色」	57
---	-----------	----

四	「国性爺合戦」をめぐる	64
---	-------------	----

内山美樹子

第三回 人 形……………信多純一……………77

——上演形態と興行——

一 文章に見えない演技の世界……………79

二 上演形態の変遷……………90

(1) 時代物の初期……………91

(2) 元禄期の時代物……………101

(3) 世話物時代の舞台……………133

第四回 作品解釈の問題点……………信多純一……………151

——「心中天の網島」——

一 浄瑠璃と演戯性……………153

二 研究と評論……………159

三 「心中天の網島」研究の契機……………164

四 上巻をめぐって……………179

五 中巻をめぐって……………198

六 下巻をめぐって……………212

第五回

近松の作劇法

——「今宮の心中」に即して——

井口洋 237

一 あすから八専土用前 239

二 此の足袋の片足は 244

三 急に嫁入を急いで来た 249

四 由兵衛目がけ打つ石が 255

五 是ぞ因果の皮切りなる 259

六 戸棚の中なは二郎兵衛 263

七 きさを由兵衛にやれ 274

八 桁丈揃ひし死に姿 290

第六回

近松と歌舞伎

鳥越文蔵 299

一 絵入狂言本 301

二 近松と坂田藤十郎 307

三 夕霧狂言 311

四 藤十郎の共演者 316

五 「けいせい仏の原」 319

近松略年譜		鳥越文蔵		343
あとがき		信多純一		353

装幀(カバー・表紙・本扉) 万 膳 寛

第一回 近松の登場



近松門左衛門(『難波土産』)

鳥越文蔵

出自を語らない近松

近松は自分がどこで生まれて、どういう生活をし、なぜ作家になったかということ、自分自身ではほとんど書き残していません。せいぜい残しているのは、死ぬ半年前の享保九（一七二四）年の自筆の辞世文で、「自分は甲冑の家に生まれて殿上人のそばにお仕えしたけれど云々」ということを言っています。

近松は本名を杉森信盛すぎもりといいますが、今の福井県鯖江あたりで生まれ育ったのです。寛文四（一六六四）年ごろに一家は京都に移ります。どうもお父さんは浪人したらしい。なぜなのかはよくわかりません。それで近松は勤めに出たわけですが、一条禅閣惠観の所とか、他のいろいろな所で働いたようです。この一条惠観は人形芝居が好きだったらしく、自分の山荘の杉の戸に人形を操っている絵を描かせていました。この杉の戸は今鎌倉に移築されています。

滋賀県大津の「高観音近松寺」たかかんのんこんとよじとか佐賀県唐津の「近松寺」きんとよじとか山口県下関の「近松橋」とか「近松」の文字のついたところは、由縁の地であるという説があります。近松は仏教の教養も相当なものと認められる作品がありますので、若いころお寺へ入って修行したというのも考えられなくはないのですが、今のところ実証することができません。

ところで、今は作家というと人気商売ですが、当時は役者とか太夫などというものは、一般の人から特別視されていました。山口県に伝えられる出生説では近松は若殿さまの落し子ということになっていまして、それだから作者になったのだ、と言われているわけです。

一 近松の登場

寛文十一（一六七二）年、近松が十九歳の時に山岡元隣が『宝蔵』という俳書を出しましたが、その中に家族五人の俳句が載っています。近松のは「しら雲やはななき山の恥かくし」という句ですが、そうすぐれた作品とは考えられません。ところが、最近になって、万治二（一六五九）年に「つむ雪やはななき山の恥かくし」という句が出ていることがわかりました。近松のは上の四字だけを書き変えたのです。これを発見した人は近松の研究者でありまして、近松の作品は他人の作品から種を取ってみたり、文章のテニヲハをちょっと変えたりしたものが多いが、若い頃から換骨奪胎の才能があったのだ、といっておられます。ともかくこの『宝蔵』という書物で近松の名が世間に初めて出たわけで、その後浄瑠璃作者への道を進んだのです。

存疑作

卷末の「年譜」で、天和三（一六八三）年九月、近松三十一歳の時に宇治座で「世継曾我」を上演した、となつていますが、確実に近松の作品だと言える最初の作品は、この「世継曾我」です。ところで、この作品の内題の下に近松の名が書いてあれば問題はないのですが、作者名があるものは見つからないのです。

それではなぜ近松の作品と言えるのか、と申しますと、それより三十年ほど後に竹本義太夫が、語ったもののさわりを集めた『鸚鵡ヶ杣』という段物集がありますが、その跋文は近松が書いています。その序文に義太夫が、「世継曾我」の文章を引用して、あれはどうも失敗だった、と作者がこだわっている、と書いているのです。三十年たってもこだわるといふ作者は、近松に違いない、ということなのです。

それでは、その前には近松の浄瑠璃作品はなかったのか、と申しますと、私はあると信じています。そういうのを存疑作と言います。現在、私たちが編集しています岩波版『近松全集』では、浄瑠璃作品は一一四作ということになっていますが、この全集より先に始めて間もなく完結する予定の勉強社で出している『正本近松全集』の予告を見ますと一四五作、それから近松二百年祭を記念して大阪朝日新聞社から藤井乙男氏の編集で出ました『近松全集』では一四七作、となつています。このように存疑作を含めると一五〇近いものがあるわけですが、その辺を押さえ切れないのが我々の悩みです。



図 1-1 「他力本願記」(大英図書館蔵)

私は近松の最初の作品は、延宝五(一六七七)年、近松二十五歳の時作った「西行物語」だと思えますが、研究者の皆さんの賛成はまだ得ておりません。二番目の作品は、延宝七年、二十七歳の時の「他力本願記」だろうと思います。これは外題簽の隣に近松と義太夫の名前が併記された脇題簽があります。ただし、この時代はまだ近松と義太夫が共同で活動しているわけではないのです。

三十歳以前の近松は宇治嘉太夫について修業し、作品を提供していたのです。当時の生活は苦しかったのでしょう。歌舞伎の大道具の仕事とか『徒然草』の講釈師などのアルバイトをして生計を立てていたようです。嘉太夫と義太夫とは師弟というか先輩後輩の関係にあったようです。嘉太夫はやわらかい語りで、義太夫は豪快な語り口でした。柔と剛がうまく調和して二人の公演は評判をとったようですが、「西行物語」上演の後でけんか別れをしています。理由は分かりません。そして近松は義太夫の方と協力関係を結び、道頓堀の竹本座を盛りたて、最後には座付作者となります。

竹本座起る

浄瑠璃は、元をたどりますと、『平家物語』を語っていた琵琶法師たちがレパートリーをどんどん拡げていって出来上がったものです。「浄瑠璃姫物語」という作品が大いに受けました。これは浄瑠璃姫と義経との恋愛譚です。平曲を語っていた人たちがいつの間にか『平家物語』ではなく、浄瑠璃を語るようになっていきました。語り手は初期には、沢住檢校とか滝野勾当とかいう琵琶法師のような名前ですが、次の代には杉山丹後掾というように加賀掾(嘉太夫)とか筑後掾(義太夫)などと同じような呼び方になってきます。

操り浄瑠璃芝居は、もとは京都で起ったのですが、江戸に伝わり、そこで流行するようになります。当時、江戸は開かれたばかりの武家の都で文化の程度もそう高くなかった。人形芝居は、どちらかというと、子供っぽいもので、そういうところが受けたのでしょう。それがだんだん洗練されてくると再び京都に戻ってきます。そして嘉太夫たちの時代には大変盛んになっていました。

義太夫は大坂天王寺近くの百姓の息子ですが、農業を継ぐのが嫌だったらしく音曲の世界に入っていきます。声も良かった、ということもあるのでしょうが、浄瑠璃語りになるのです。大坂で修業し始め、京都で嘉太夫の座に入りますが、嘉太夫とけんか別れをしてから九州の方まで巡業したりします。しばらくして大坂に戻り、道頓堀で開業します。そうしますと、嘉太夫は、生意気だということで、京都からわざわざ

三文豪

大坂に出て来て、義太夫の小屋のすぐ隣の小屋で義太夫と競うようになります。よほど義太夫が憎らしかつたように思われます。しかし、そのうち嘉太夫の小屋から出火して、京都に戻るようになります。隣り合っていたのに、なぜ義太夫の小屋が焼けなかったのか、わかりません。火事になったということは、最近、昭和五十三年に土橋宗静という人の日記が発表されたなかに、「三月二十四日道頓堀操り嘉太夫芝居より火が出て、東風に西材木小屋まで残らず焼け申し候」と書かれています。義太夫の小屋が焼けた、とは書かれていません。

この二人の競争の中で、嘉太夫は西鶴に頼んで「暦」や「凱陣八島」という浄瑠璃を書いてもらい、義太夫は、それに対抗するために「賢女手習并新暦」を上演しました。西鶴という名前が出たついでに申しますと、西鶴・芭蕉・近松は元禄の三大作家と呼ばれますが、よく考えてみますと、元禄六・七年、西鶴・芭蕉は死んでいます、その頃、近松は作家としてやっと自信をつけたわけで、三十年くらいの隔りがあります。時代が違うのではないか、という感じがします。

近代になって近松を初めてとり上げたのは塚越芳太郎という人の書いた『近松門左衛門』という本で、明治二十七年に出ました。この本は、十二人の文豪のうちの一人として近松を扱っています。カーライル、マコウレー、ウォルズウォルスとならんで、日本人は近松、頼山陽、新井白石、滝沢馬琴、荻生徂徠らがとり上げられています、

当流浄瑠璃

西鶴や芭蕉は入っていません。明治の頃は近松や馬琴の方が人気があったようです。その後西鶴・芭蕉・近松は並び称されるようになってくるのですが、三十年のへだたりは小さくないのではないか、という気がする、と今は言っておきましょう。時代が隔るに従って時代区分は大づかみになります。今の私は、近松のころ、いわゆる元禄期を研究しているのでこの三十年にこだわるのです。

年譜に戻りますと、貞享二（一六八五）年、二の替、竹本座「出世景清」を上演、とありますが、この作品以前の浄瑠璃を古浄瑠璃、以後を、新しいという意味で当流浄瑠璃と呼びます。古浄瑠璃は現在五〇〇ぐらいの作品が残っています。「出世景清」は新旧の分水嶺をなす作品だ、ということになっています。これはまた確実に近松の作品だ、と言える第二作目に当ります。

ところで、古いのと新しいのを、どういう基準で分けるのか、ということはよく分かりません。景清は、『平家物語』では逃げ上手の景清などと言われていますが、芸能、たとえば謡曲などでは、一人になっても頼朝を殺そうとする強い武将とされています。浄瑠璃でもそういう伝統を踏まえて書かれています。近松の景清は結局殺されますが、観音さまが身代りになって生きています。観音さまが身代りに立つ、というあたりは古浄瑠璃的です。こういった古浄瑠璃的なものを「出世景清」は、いくら

かもっているのですが、景清を愛するあまりに裏切ってしまう女性の心理を深く掘り下げているところが新しい、と考えられます。そういう点で「出世景清」は新旧の境い目になる作品なのです。

その後浄瑠璃作者として着実に、優れた作品を書いていくのですが、年譜の元禄六年(四十一歳)の項に、

竹本座「せみ丸」

二の替、歌舞伎「仏母摩耶山開帳」都座

とあります。この「仏母摩耶山開帳」を書いてから、十年間ぐらいは、浄瑠璃をぜんぜん書かないわけではありませんが、もっぱら歌舞伎作者としての活躍の時期なのです。

歌舞伎作者時代

そのころ近松は京都に住んでおり、京都の歌舞伎の代表的な名優に坂田藤十郎という人がいました。菊池寛に「藤十郎の恋」という戯曲がありますが、あのモデルになった藤十郎です。その坂田藤十郎と組んで、歌舞伎を三十ぐらいは書いただろうと思います。

こんど岩波の『近松全集』に入れる歌舞伎も三十です。もう少し書いているのだろ